

## 職業軍人の戦後と土地改良区との関わりについて

本山, 聡毅  
熊本県社会保険労務士会 : 会員

<https://doi.org/10.15017/7344006>

---

出版情報 : エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 40, pp.35-51, 2025-03-25. 九州大学附属図書館付  
設記録資料館産業経済資料部門  
バージョン :  
権利関係 :



## 【論説】職業軍人の戦後と土地改良区との関わりについて

本 山 聡 毅

### 一．はじめに

本稿では元陸軍のある高級将校の戦後について述べてみたい。一九四五（昭和二〇）年八月の敗戦とその後の社会的混乱の中で、旧軍人たちは公職追放や軍人恩給の停止で、逼迫した生活を強いられた。だが失職した軍人たちも生活はしていかなばならない。どのような暮らしを送っていたかは様々だが、戦後の社会変化は単線状に進んでいったわけではなかった。敗戦後の占領期における民主化から逆コース、そして軍人恩給の支給再開から高度経済成長期を経て、安定成長期までを過ごしたある軍人が、バブル経済期の少し前に亡くなった。彼は地域の農業に、かつて深く関わっていたのである。自らが農業に従事したというよりも、農業に関する組織化の中でその名が残っている。

元々アジア・太平洋戦争の主要因は、特に石油というエネルギー資源の確保についての懸念にあり、さらにその他の資源も確保することが、当時の日本の国家運営にとって絶対に必要なであった。このことは数多の

先行研究によって指摘されており<sup>①</sup>、また戦後も元職業軍人が同戦争を、「自存自衛の戦争」とする観念を堅持する元ともなった<sup>②</sup>。ただそれは戦前の日本の都合からみた理論であって、歴史的な批判を免れないものであった<sup>③</sup>。加えて食糧の自給能力は戦前においても限界があり、一九四〇（昭和一五）年度以降でも「相当多量の外米輸入を必要とし、主食自給問題が戦争指導上の重要課題となるにいたった。その輸入先は主として佛印及び泰であった」という様相がある<sup>④</sup>。戦後の食糧難についてはよく喧伝されているが、戦前や戦中においても食糧問題は存在していたのである。今回紹介する旧軍人の戦後の経歴には、彼が第三二師団に所属し南洋のハルマヘラ島で、敗戦まで連合軍と対峙した経験が反映されていたようである。

以下、第三二師団とハルマヘラについて簡単に述べる。エネルギー資源等確保のため、アジア・太平洋戦争でインドネシアを中心とする南方資源地帯に侵攻した日本軍であったが、日本軍の占領地域は膨張し過ぎた。ほどなく収縮期が始まるのである。南太平洋ではソロモン諸島のガ

ダルカナル島から、一九四三（昭和一八）年二月に撤退することになった。アメリカ合衆国を中心とする連合軍の反攻が始まると、東からは米太平洋艦隊の強力な空母機動部隊が中部太平洋を西へと横断する動きをみせ、もう一つの反攻軸にはニューギニア島北岸を西進しつつ島伝いにフィリピンへと攻め上ろうとする、マッカーサー將軍率いる部隊があった。ニューギニア島から東南アジアの資源地帯に向かう進路上には、赤道直下の小島であるハルマヘラ島が存在した。飛行場が設置された要衝のこの島を守備するに当たって、日本陸軍の方針は二転三転したが、最終的には第三二師団の派遣で結論をみた。このハルマヘラ島については次のようにもいえる。近年において中国の南太平洋への進出が危惧の念で注視され、ニューギニア島やソロモン諸島の重要性が浮上しつつある。それらを中国が拠点化した場合、すぐ西隣にあるインドネシアのハルマヘラ島は、フィリピンとの結節部にも位置している。かつて日本が豪北と呼称した方面において、この島は軽視できない位置にあるのではなからうか。

さて本稿の旧軍人の事例だが、熊本県の七城町という農業地域での記録である。戦後に土地改良法が一九四九（昭和二四）年に制定されたことにより、熊本県でも耕地協会が設立された。同法はその後改正を経ていくが、県下各地で法に基づき土地改良区という団体が設立されていく。この団体は土地改良事業の実施を目的とし、農業者が農事生産の上で不可欠な用排水施設、道路等の設置、維持、管理、そして農地の区画整理といった事項を担う。まずは集落ごとに組織された土地改良区であったが、時代とともに統合が進み現在は熊本県土地改良事業団体連合会（愛称「水土里ネット熊本」）が、それらを統括する上部団体となっている。

以下では菊池市七城町の南寄り、亀尾地区にある板井という集落での、土地改良区の事例を探求していきたい。

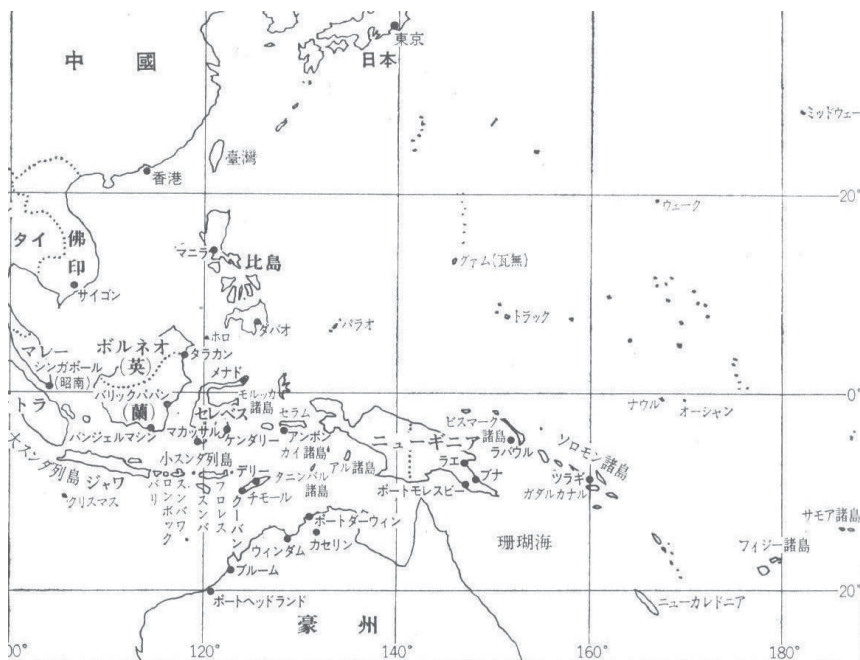


図1 豪北概見図  
(ニューギニアとセレベスの中間にある、kの字の形をした赤道直下の島が、ハルマヘラである。)

(出典：防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 豪北方面陸軍作戦』11頁。)

## 二、先行研究が示すもの

敗戦後に元軍人たちがどのような職業に就き、いかなる生活を送っていたかの全てを、網羅して分析することは不可能といつてよい。例えば陸海軍の将官たちに限っても、戦後それも公職追放解除後どのような職業に就いていたかを、定量的に漏れなく解析することは困難である。彼らは恩給年金が支給されるようになると、特に労働しなくても生活できた様子が窺われる。それに年齢的にも隠棲する人たちが大半だったよ

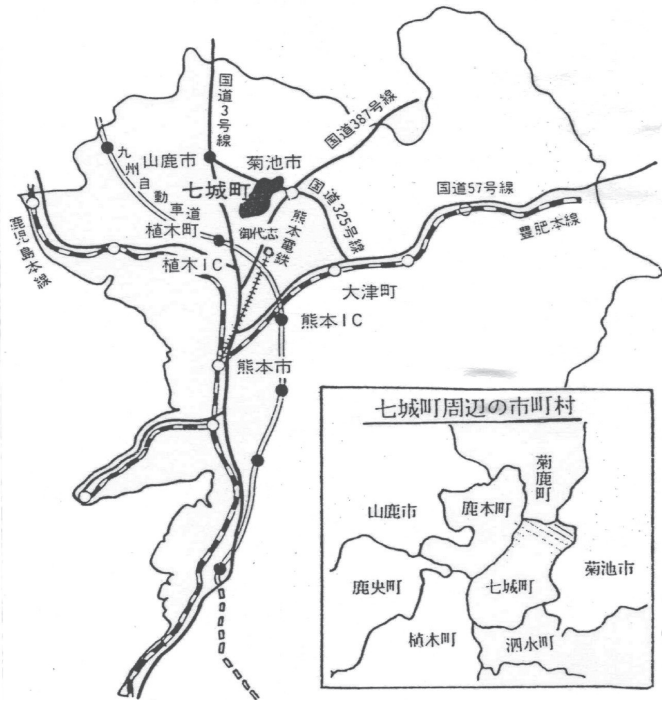


図2 菊池市七城町位置図

(出典：『七城町誌』4頁。)

うだ。戦後の活動が目立つのは、造船官をはじめ技術系武官にみられるように、年齢的に働き盛りだった旧尉官たちや、統括的な管理業務に従事する旧佐官たちが、傾向性としてはとらえられるようである。<sup>7)</sup> 本稿と関連する先行研究をみていくと、海軍は技術との関係が深かったことがわかる。戦後の技術発展に海軍の遺産が作用したとする諸研究も多い。陸軍は相対的に技術への理解は薄かった。<sup>8)</sup> そうした背景もあってであるが、陸軍の将校は農業との関連がみられるようだ。

海軍については技術系士官に関して、沢井実氏が「戦後における元造船官の活動に関する一考察」(二〇一七年)や、「海軍施設系技術官の戦後に関する資料」(二〇一七年)で説明している。造船官たちは民間の造船所に転じたり、建造法や生産管理で役目を果たす者もおり、再軍備が始まってからは自衛艦艇の分野で働く者もいた。一方で施設系技術官は尉官や少佐クラスの人々が多いようだ<sup>9)</sup>が、民間企業勤務が圧倒的に多い。沢井氏の研究によって、技術上の人的資源が戦後どのように続いているのかを見ることが出来る。もちろん軍の技術に関わったのは士官ばかりではない。技師や技手といった文官もいた。<sup>9)</sup> 沢井氏は『海軍技術者の戦後史——復興・高度成長・防衛』(二〇一九年)で、彼らの戦後に関する苦い思いや、戦後の発展を担おうとした自負心まで、克明に解き明かしている。その他にも前岡孝則『技術者たちの敗戦』(二〇〇四年)や同『戦艦大和誕生』上・下巻(一九九九年)は、造船に限らず新幹線に活かされた航空技術、さらには日本が立ち遅れた電波技術まで詳細に語っている。古くは中川靖造『海軍技術研究所——エレクトロニクス王国の先駆者たち』(一九九〇年)にもみるとおり、海軍技術と戦後日本との関連は説かれていた。もちろん「軍の技術が戦後の発展につながった」との

単純な理解では実相を捉えられない。従って様々な保留を付けてだが、戦後復興から高度経済成長への礎石としての技術の継承を、広範な先行研究でたどることができる。

その他に海軍の技術士官による個人的な回想としては、熊本県菊池市出身ということで、中野義明『肥後もっこす一代』(二〇〇四年)を挙げたい。彼は敗戦時に海軍技術大尉で、戦後に浦賀ドックの取締役等を務め、その後は日本エアー・フィルター代表取締役となった。浦賀ドック勤務時代の一九五〇(昭和二五)年には、アメリカ合衆国海軍横須賀基地に出向し、上陸用舟艇を突貫工事で造ったそうだが、これはかつての上司の小山正宣元大佐の希望で出向したものであった。小山元大佐は以前は呉海軍工廠造機部の作業主任であった。中野氏は上陸用舟艇は朝鮮戦争の仁川上陸作戦に使われたのではないかと推測している<sup>10</sup>。敗戦時に尉官級だった海軍の技術士官は現場工程の運営管理に関わり、左官級はそれより上位の統括管理や、他組織との調整を務める傾向があったとみること<sup>11</sup>もできよう。また兵科将校でも海軍では次の事例がある。やはり熊本県菊池市出身の松田千秋元少将は、戦後にファイリングシステムの会社を立ち上げ、特異な事業家として成功している。松田発明研究所からマツダジムキ、そしてマツダカルテックスと名を変えたが、事務ファイリングの特許を基とした企業であった。

組織や集团的視座からするものもある。山縣大樹氏の『帝国陸海軍の戦後史——その解体・再編と旧軍エリート』(二〇二〇年)では、敗戦後に解体された軍組織が、その後の再軍備の過程の中で様々な要因によって、影響力を取り戻していく様子が詳述されている。もちろん陸海軍で違いがあり、戦犯や公職追放は陸軍の方が多かった。そして一九五二(昭

和二七)年のサンフランシスコ平和条約を経て翌年には軍人恩給が復活した。同書は陸海軍組織の戦後の様相を克明に辿っており、学ぶところが多い。同書は吉田裕氏の『兵士たちの戦後史——戦争の経験を問う』(二〇二一年)にも言及しているが、下士官や兵士たちの戦後は多様であり、また苦難や回想についても、激変した世相の中で揺れ動く様子が詳細に分析されている。陸軍の親睦団体であった財団法人の偕行社が協力して編集された『陸軍士官学校』(一九六九年)でも、「将校たちは、国家の扶持を離れると、多少の照れ臭さを覚えながらも、改めて収入を得る方法を考えなければならなくなった」と記している<sup>12</sup>。もちろん全ての旧軍人たちが、新たな生業で順調だったわけではない。「中には、どうしても軍人以外の職になじめない者もいた」し、「昔の部下からは、ひどく慕われているが、企業では、あまり役に立たないのである」という人々もいた<sup>13</sup>。一口に元陸軍将校といっても同質ではない。彼らの組織内部での世代の違いや、陸軍幼年学校出身か旧制中学卒業かという出自の差、また敗戦時の階級の上下といった諸要素でいろいろな相違点があった。角田燎氏による『陸軍将校たちの戦後史——「陸軍の反省」から「歴史修正主義」への変容』(二〇二四年)では、偕行社の沿革や活動を中心に、元陸軍将校たちが戦後にどのような責任を感じ、一方で旧エリートとしての誇りを持ち続けたか、さらには彼らの戦争認識の多様性や、偕行社そのものの時代による変遷等を詳述している。

戦後の軍人たちがどのような職業に就いていたかの定量的な分析は、渡邊勉氏が「職業軍人の退役後の職業経歴」(二〇一七年)で、SSM調査(社会階層と社会移動に関する全国調査)を活用しながら試みている。調査資料の制約はあるが、陸軍士官学校卒業生の戦後の職業では「自営

業を除けば、ほぼすべてホワイトカラーである」こと、そして陸海軍の主要な軍人で記録の残る人物たちは自衛隊勤務が最も多く、会社役員・団体役員がそれに次ぐし、「おそらく記録のない者には、農業であったり、自営業を営んでいたりする者が、多く含まれていたに違いない」とされている。<sup>14</sup> 渡邊氏の論考は資料面での制約や、一九四六年から一九五五年までの職歴を対象とするという限定はあるが、「エリート層としてホワイトカラーに安定して就き続ける者がいるのに対して、他方で農業に就く者も多かった」ことを明らかにしている。<sup>15</sup> 敗戦後の軍人たちの職歴は多様であった。

私は次に、ある陸軍将校の軍歴と戦後を述べていきたい。

### 三、陸軍大佐本山武雄の軍歴と戦後

#### (一) 士官学校後の任官と中国への出征

一八九八(明治三一)年九月に熊本県菊池郡清泉村亀尾(現菊池市七城町亀尾)に生まれた本山武雄は、旧制中学卒業後一九一七(大正六)年一月に士官候補生として、当初は熊本にあった歩兵第二三連隊に入隊した。翌年一月に陸軍士官学校入校、一九二〇(同九)年五月に士官学校を退き、翌月に見習士官を経て、少尉任官したのは同年一月であった。兵種は歩兵科であり、三年後に中尉に昇進。一九二四(同一三)年六月には鹿児島歩兵第四五連隊に転じ、翌年一月に陸軍歩兵学校に入校、四ヵ月ほどの専門教育を受けた。その後は一九二六(同一五)年一月の佐賀県での特別大演習に参加の他、一九二八(昭和三)年一月下旬には「御大禮観兵式参列ノタメ上京」し、翌月上旬に帰隊といっ

たことが記録されている。後の過酷な日々比べれば、まだ平穏だったといえるかもしれない。一九三〇(同五)年八月には歩兵第四五連隊の大隊副官に就任、同日付けで大尉になった。以後は同連隊での勤務が続き、連隊麾下の中隊長や歩兵砲の隊長も務めた。一九三七(同一二)年八月に少佐任官、第四五連隊の中国出征があったが、帰還後は同年二月に宮崎県内の中学校等の短期間の勤務を経て、年末には陸軍歩兵学校への勤務となった。

翌一九三八(昭和一三)年五月の動員により、留守部隊で編成された歩兵第一四五連隊に着任し連隊副官として勤務。今回の勤務でも中国大陸の戦場に派遣されたが、戦闘は激しかったようである。同年八月に敵の迫撃砲弾で負傷した。防衛庁防衛研究所『戦史叢書支那事变陸軍作戦(二)』によれば、経緯は次のようなものである。日中戦争の拡大に伴い、留守第六師団担当で特設された第一〇六師団が中国大陸に派遣されるが、武漢攻略作戦の九江攻略で苦戦し幹部が多く死傷した。「第一一軍司令官は、第一〇六師団の上級指揮官が多数死傷し、戦力が低下したのを知り、同師団の戦力を回復することく処置した」というが、その中には「聯隊副官本山武雄少佐一三・八・九負傷」の一行も含まれている。<sup>16</sup>

#### (二) 戦傷による内地帰還、再出征と南方への師団派遣

本山武雄は一九三九(昭和一四)年八月一日にも負傷するが、この時はさらに重症であった。江西省の泉水坵附近討伐戦の最中に敵に撃たれたものであり、「右恥部右臀部右座骨粉砕骨折貫通銃創」でその後長期療養を要した。一〇月二日に一四五連隊副官の任を解かれ、兵器本廠付きに兼ねて陸軍経理学校教官を命じられた。また中国で入院中であり、

内地の陸軍病院に転送され、慎重な療養の後退院できたのは翌年二月であった。同月下旬に陸軍経理学校に着任し、その後は試験委員等も務めている。一九四一（同一六）年八月に陸軍中佐となり、一九四三（同一八）年三月に第三二師団副官を命じられ中国へと向かった。また六月末日には師団の管理部長も兼ねた。以後は同師団での勤務が敗戦時まで続く。一九四五（同一〇）年六月に陸軍大佐に進み、同人の軍歴事項証明の最後の行は、一九四六（同一二）年六月一四日に予備役編入、同月一八日で復員完結となっている。

その第三二師団（楓兵団）だが、一九三九（昭和一四）年二月に第一師団の留守部隊として東京や甲府、佐倉において編成された。同年五月には中国大陸に派遣され、山東省の占領地域の警備任務に就き、「在滿師団とほとんど同じ優良編制」であった<sup>17</sup>。中国の北寄りでは冬は極寒となる地域にいた同師団は、一九四三（同一八）年中ごろから南方戦線転用の内命を受けた。翌年四月からフィリピンのマニラに向かい、次に第二方面軍の隷下となり赤道直下のハルマヘラ島に移っていくが、洋上移動は簡単なものではなかった。この四月の二六日にバシー海峡で輸送船が敵潜水艦によって撃沈された。師団麾下三個の歩兵連隊のうち、一個連隊に大損害を受ける惨事であった。その後も五月六日に敵潜水艦の雷撃で輸送船一隻を沈められるが、幸いにこの時は「人員のほとんどと、兵器の機関銃以下を海水に漬けることなく収容し得た」のである<sup>18</sup>。豪北方面の戦況は油断できぬものであった。ハルマヘラ進出後も一九四四（同一九）年八月には空襲で師団参謀部が被害を受け、師団長自身も危ういところであった<sup>19</sup>。同島の北隣のモロタイ島には連合軍の大型機用飛行場があったため、敗戦の日まで第三二師団は戦場の緊張に包まれていた<sup>20</sup>。

表1 第32師団の将校主要職員表一部抜粋（最終時点）

		第三十二師団司令部	
参謀部	参謀	参謀長	師団長
	同	大佐	中将
	附	大佐	石井 嘉穂
副官部	高級副官	大佐	星野 一夫
	副官	大佐	小杉 栄蔵
	大尉	中村 正	秋田 岩吾
	少佐	永井 義郎	忽滑谷武夫
	大尉	高屋 季蔵	本山 武雄
	大尉	山辺 進	吉川 浩
管理部	附	本山高級副官兼任	津田 克正
	大尉	吉田 正三	保坂 健造
	大尉	田崎 繁亀	堂本真一郎
兵器部	大尉	原島 直治	林 清一郎
	少佐	笠 忠男	山田 次郎
	大尉	菅 恒司	戸田 賢
軍医部	部長	少尉	村岡 恒司
	部長	少佐	菅 恒司
	部長	少佐	菅 恒司
	部長	少佐	菅 恒司

（出典：『ハルマヘラ戦記』90頁。）

表2 第32師団編成表（1944年5月師団主力のハルマヘラ到着後、別途追及してきた部隊もある。）

部隊名	指揮官	備考
師団司令部 (編第四二五一部隊)	師団長 中村 嘉徳 参謀長 大佐 吉田 栄治郎 (戦死) 参謀 大佐 小杉 栄蔵 同 少佐 山本 義雄 (戦死) 高級副官 大佐 本山 武雄 兵隊部長 大佐 田崎 繁亀 経理部長 大佐 林 清一郎 大佐 小池 安正 (戦死)	師団兵力は 実員一三、五七〇人 馬匹一三、二〇〇頭 なるも船舶の都合上 その一部上海に残留 人員一三、〇〇〇人 馬匹一、〇〇〇頭
歩兵第二〇連隊 (編第四二五四部隊)	連隊長 大佐 小池 安正 (戦死) I 長 大尉 小沢 庄三 (戦死) II 長 少佐 長谷川 辨 (戦死) III 長 大尉 藤本 周次 (戦死)	歩兵連隊は夫々 三ヶ大隊 歩兵砲四門 連射砲六門 他二通信中隊 作業隊
歩兵第二二連隊 (編第四二五五部隊)	連隊長 大尉 守田 義輝 (戦死) I 長 少佐 服部 寛成 (戦死) II 長 大尉 田村 俊夫 III 長 大尉 前田 久気	他二通信中隊
歩兵第二三連隊 (編第四二五六部隊)	連隊長 大佐 宮内 幸五郎 I 長 少佐 近藤 繁成 (戦死) II 長 大尉 松浦 克巳 III 長 大尉 田中 (戦病死)	砲兵連隊は 砲兵連隊は 三ヶ大隊 (九中隊) 中隊は野砲四門
野砲兵第三二連隊 (編第四二五七部隊)	連隊長 大佐 三田村 佐一 I 長 大尉 田中 (戦病死) II 長 大尉 松浦 克巳 III 長 大尉 田中 (戦病死)	
工兵第二二連隊 (編第四二五八部隊)	連隊長 大佐 佐藤 武志 I 長 少佐 加藤 紫朗 II 長 大佐 中川 千代吉 III 長 大佐 中川 千代吉	工兵連隊は 三ヶ中隊 (十二小隊)
輜重兵第三二連隊 (編第四二五九部隊)	連隊長 大佐 中川 千代吉 (兼) 大佐 中川 千代吉	輜重兵連隊は 自動車一中隊馬一中隊
第三二師団兵器勤務隊 (編第四二六一部隊)	隊長 大佐 木場 茂	
第三二師団衛生隊 (編第四二六二部隊)	隊長 大佐 小菅 俊平	
第三二師団第一野戦病院 (編第四二六三部隊)	病院長 軍医少佐 山田 常道	
第三二師団第二野戦病院 (編第四二六四部隊)	病院長 軍医少佐 山田 常道	

(出典：『ハルマヘラ戦記』19～20頁。)



図3 ハルマヘラ島詳細図  
(北隣のモロタイ島には連合軍の飛行場があった。)

(出典：『ハルマヘラ戦記』5頁。)

(三) ハルマヘラ島で痛感した食糧確保の重要性  
連合軍潜水艦のシーレーン破壊活動により補給の途絶した島で、第三二師団は食糧確保に務めていた<sup>(21)</sup>。また戦地における実情として、北隣のモロタイ島に攻撃隊を派遣しているが、挺身隊からは「兵よりも糧秣を送れ」と報告を受けたりしている。ハルマヘラ本島では現地自活に務め、こうした体験は高級副官兼管理部長としての本山に強い認識を与えることになる。すなわち食糧確保の重要性である。耕作可能地のある南方の島嶼という地理的条件も、それに有利であったことも挙げられよう<sup>(22)</sup>。第三二師団が食糧生産を重視していたことは、一九七〇年代半ばに本山宅を尋ねた来客者に関するわずかな記憶もある。「部隊(第三二師団)が『兵は戦力であり、無駄に死なせてはならぬ。そのためには食糧をしつかり備えなければならない』という考え方のおかげで、生き残れた。その

ことを感謝している」という談話が、間接的に伝えられている。敗戦後は指揮下の部隊や師団直轄での漁獵班も編成され、舟艇建造等でハルマヘラの海軍部隊も協力し「春島の復員将兵は、その上陸地点でその体力の充実に皆を驚かせたことはこうした人々の努力があったからだ」と伝えられている。<sup>25</sup> 南方戦線での現地自活については、ニューブリテン島のラバウルでの今村均大将の例が有名だが、第三二師団もやはり現地自活とならざるを得なかったわけである。

#### (四) 故郷に帰還し土地改良区の初代理事長に

敗戦後に熊本県の菊池郡清泉村（現菊池市七城町の南部）に帰った本山は、軍人勤務で永く離れていた亀尾地区の板井という集落で、その後の日々を過ごしていくことになる。自らの戦地での体験や戦後の食糧危機をみて、ごく当たり前のこととして彼は農業の重要性を痛感していた。後年語ったところによれば「生きていくためには食糧が大事だった。食べていくことができれば何とかなる。だから（板井集落の中ほどから南西に上がる、長い坂道の先の）土地を皆で耕して、（戦後の）畑やその後の田圃が整っていった」ということであった。前掲の『陸軍士官学校』は次のように語っている。国家の支えを失った元軍人たちにとって「故郷に帰れば、多少とも耕す土地があるという人は、幸福な方であった」というが、日々の苦難は簡単なものではなかった。農家出身の如何に関わらず「百姓でもするさ」と口ではいつても、「実際にやってみると、庭にカボチャを這わせるようなわけにはいかなかった。いわんや、晴耕雨読というような理想の生活は望むべくもなかった」という辛い毎日が何年も続いた。<sup>27</sup> 当時は一九四六（昭和二一）年一〇月の農地調整法改正や

自作農創設特別法の公布以降、農地改革という大変動で熊本県でも地主層の社会的影響力が次第に消え、「耕作者自らがその労働の成果を享受する」<sup>28</sup> 新たな時代が到来していた。耕作者たちは農業生産性の向上に、主体的に取り組む動機付けを手に入れたのである。一方で本山個人の生活だが、その後に軍人恩給が一九五三（同二八）年に復活され、暮らしが以前より安定するころになると、年齢事情もあってか、彼が自ら農業に従事することはなくなった。持っている少しばかりの農地は、親戚に幾許かの年間使用料で貸し出した。<sup>29</sup> しかし彼は、次に農業に関する公的な役目を担うことになる。

亀尾地域に広がる農地は集落に比してやや高い位置にあり、板井でも水の確保問題が農地の生産性を制限していた。地下水を汲み上げるにも各戸で井戸を掘るのは手間であり、そうした難しさを解消していくためには集団的な組織協力が求められた。地域の人々のそうした努力や模索は、高度経済成長期に一つの答えを出すことになる。一九六一（昭和三十六）年五月に設立が認可された、板井土地改良区という組織がある。灌漑施設の維持管理と区画整理を事業とし組合員数は一二四人で、当時の七城村役場内に事務所を置いた。本山が初代の理事長に選任された。元々軍人に敬意が払われていた地域性や、「仕事も引退しているんだし、あの人に引き受けてもらおう」という周囲の気分もあったのではないか。<sup>31</sup> 例えば農業協同組合に関する研究では、熊本県の特徴として行政依存の強さを指摘している。<sup>30</sup> とすれば土地改良区についても行政との密接な係わりが望まれたであろうし、その点でも旧軍人の経歴は都合がよかったと思われる。一九六四（同三九）年一〇月の『七城弘報』第一二三号では、砦村・加茂川村・清泉村が合併してできた、当時の七城村の一〇周年を

記念し中学校体育館で開かれた式典で、功労者の表彰も行われたことを報じている。農地行政への功労者や社会福祉事業への貢献で表彰された人々と共に、「畑地灌がい事業の推進」として本山武雄の名がある。

#### (五) 地域の土地改良区での活動とその後

本山は一九六五（昭和四〇）年にも土地改良区で再任された。翌年二月には臨時総代会で七城土地改良区への合併を可決し、その翌月に熊本県に合併申請し認可されていく。合併のためには総代会で構成員の合意を得る調整が必要であるし、会議当日の運営段取りや、終了後には手続書類の瑕疵なき事務処理等、雑多で体系的な諸事項を所定の期限内に遂行せねばならない。それらは組織の代表者の名で行われるものだ。そして合併当時の七城土地改良区の理事長は園木木という人物で、次に触れる「農業構造改善之碑」では、彼を碑設立地区の第二代理事長としている。七城地域の『農業構造改善計画書』を辿ると、一九六二（同三七）年九月分で板井区域については年次計画の第三年で、区画整理と確定測量が挙がっている。『年度別農業構造改善事業実施計画書』の一九六六（同四二）年度分や、同年度の再度実施予定の『農業構造改善事業（第二次）計画書』によれば、板井地区では土地基盤整備としての圃場整備や、経営近代化施設としてトラクター及び附属作業機の導入に取り組んだようである。

地域の人々の農地整備の努力は、語り残すべき事績であった。亀尾地区の田畑が広がる農道脇に、一九六九（昭和四四）年五月に建てられた「農業構造改善之碑」がある。事業を遂行してきた組合員一三三人の、「壮挙ト一致協力ヲ讃エソノ労苦ヲ慰ブモノデアル」と、碑の裏側に刻まれ

た事績を簡単に紹介する。まず一九六一（同三六）年に畑作振興対策として、県下各地に先立って工費一、四四〇万円により地下水利用の灌漑施設を完備し、一九六三（同三八年）にこの高台の畑の一部について水田化が試みられた。そして本格的な圃場整備が「本地区ハ逸早く指定ヲ受ケ」て、一九六七（同四二）年六月から翌年三月にかけてなされた。施工者として熊本県土地改良区事業団体連合会、そして灌漑施設に株式会社溝田鉄工所熊本支店と記されており、面積三七・七八ヘクタール、事業費として三、四二二万円を要した。今日広がる広大な田畑への、人々の努力の記憶として建てられた石碑に、多くの関係者の名が刻まれた。正面向からは第三代までの理事長と、歴代理事の名前が彫られている。右から順に理事長として記されたのは初代本山武雄、二代園木木、三代守塚良雄であった。なお守塚については正確には板井地区の委員長ということであった。<sup>24</sup> 碑の正面の題字は熊本県知事寺本広作の書であり、向かって右側面に当時の七城町長で七城土地改良区理事長の古田愿の名が刻まれている。戦後の長い年月をかけた、農地開墾と整備の記録である。

#### (六) 遺されたもの

本山武雄は一九八五（昭和六〇）年六月に死去し、その遺品等は同居する長男によって多くが廃棄されていった。陸軍経理学校教官時代のテキスト等もあつたというが、「もう古くて、時代的にも役に立たない知識だから」と、長男が整理してしまった。それでも廃棄を免れて今日まで残っている書籍類がある。元陸軍の軍人としては当然であるが、戦術関係の書籍や資料が一番多く、次に所属等で関係した部隊の歴史、そして

表3 七城町土地改良区統合概要

1961 (昭和36) 年5月18日	板井土地改良区設立認可。
1961 (昭和36) 年5月23日	板井土地改良区設立総会において <b>本山武雄</b> が初代理事長に就任。
1963 (昭和38) 年1月11日	辺田地区、台地区、荒牧地区、本村地区、加恵地区で <b>七城土地改良区</b> 設立。
1965 (昭和40) 年	前川地区を七城土地改良区へ編入。
1966 (昭和41) 年2月	昭和40年度板井土地改良区臨時総代会で <b>七城土地改良区</b> (当時理事長：園木 木) との合併が可決。
1966 (昭和41) 年3月	熊本県へ合併申請し、それに基づき合併認可。その後、板井地区の農業構造改善事業が始まる。
1969 (昭和44) 年～ 1972 (昭和47) 年	菊池地区圃場整備、山崎、水次、岩瀬地区を七城土地改良区へ編入。
1980 (昭和55) 年～ 1987 (昭和62) 年	鹿本南部1工区、板井畑地、十三部1工区、十三部2工区・3工区、鹿本南部2工区、うてな台地1工区、岩瀬補足農構地区、うてな台地2工区を七城土地改良区へ編入。
1995 (平成7) 年～ 1997 (平成9) 年	花房中央地区、赤北地区を七城土地改良区へ編入。

(七城町土地改良区から提供のデータを一部加工。)

軍人だったころの写真集や画集がある。以下は順にそれらを資料として紹介したい。

① 戦術関係書籍類、一〇冊他

古い時期から辿ると、まず『戦史講義録／陣地攻撃・夜間ノ攻撃(下巻)』という書物は本山が歩兵第四五連隊にいたころの本で、露土戦争や日露戦争を詳しく分析し書籍表紙には「日本将校ノ外閲覧ヲ禁ス」の金文字が付されている。

森五六『世界大戦史講話』は第一次大戦に関する考察を、ドイツを中心にヨーロッパ各国の状況から説き起こした四四六頁の書籍で、当時陸軍次官だった畑英太郎が序文を書いている。岡本茂『古代東洋兵學孫子解説(終)』は、この本の著者が輜重兵大尉時代にまとめたもので、当時第

三師団司令だった谷壽夫による序文が寄せられている。『小戦例集』という二冊セットの箱入本があるが、「實戦の経験なき青年將校並將校生徒の為に心得となる可き實戰談を聴取して筆記呈出せしめ之を集録せるものなり」という訓話的解説書で、紹介戦例の図面も添付されている。菰田康一編『昭和五年陸軍大學校滿鮮戰史旅行講話集』という書籍もあるが、秩父宮が陸軍大學校在学中に参加した戦史旅行の記録で、本山は一九三四(昭和九)年に購入している。

安西利三郎『戦術原則圖解百題』は本山が歩兵大尉だったころのもので、「戦術研究上良く問題になることを一見明瞭なる様に圖示したものである」との序文にあるとおり、様々な戦術行動の原則を図で解説したものである。その他に本山本人も専門雑誌から資料を集め、自身のための「戦術之参考」という手作りの冊子にまとめていた。この手作り冊子は少佐時代のものである。

なお他に以下の三冊があるが、これらは本山の外地出征中にその長男が購入し、そのまま残っていたものようだ。隈部一雄『内燃機關學』(一九四四年訂正二九版)、大井上博代表翻訳編輯『戰車工學』(一九四四年再版)、そしてツェー・エー・リヒタース著『化學戰と軍用動物』(新美達郎他訳、一九四五年)である。

② 部隊史や所属関連、計一五冊

これらについては、まず部隊史が挙げられる。戦後の一九八一(昭和五六)年に『歩兵第四十五連隊史』が編纂され、同連隊の一九三七(同一二)年七月二七日現在の編成表に、歩兵砲中隊長として少佐本山武雄の名がある(同書一七一頁)。また同連隊に所属した経歴を持つためか、

牛島満伝刊行委員会編『沖繩軍司令官牛島満伝』（一九七二年）も購入していたようである。本山個人に関係が深いものでは、士官学校第三二期生で戦後に発行を始めた『三二会誌』がある。年に一〜二回の発行で、一〜九号及び一二号が残っている。後は偕行社熊本支部による『熊本偕行社員名簿』が、一九五九（同三四）年二月のもの一冊だけが残っている。戦後も旧軍人たちは士官学校同期のつながり他で、相互に連絡を取り合っていた。その他には西川虎次郎の書いた『明石將軍』という一九三四（同九）年の書籍や、本山本人が手製で一冊にまとめた「偕行社記事・寫真集」が残されている。

### ③寫真集、画集及び手帳、計一〇冊

駐滿記念冊子頒布會という団体が一九二五（大正一四）年に発行した、『第六師團滿州駐劄記念』という非売品の寫真冊子があるが、巻末に「滿蒙産業經濟一般」という四二頁にわたる記事が添えられている。次に陸地測量部が撮影した『昭和十年特別大演習寫真帖』が、表紙の欠落した状態で残っている。この冊子には一九三六（昭和一一）年三月付けで、參謀本部からの「本寫真帖ニハ総監陛下御尊影ヲ奉掲シアルヲ以テ之カ取扱ニ注意シ特ニ御尊影ノ複寫ハ禁セラレタシ」という注意書きが付されている。また第五期幹部候補生第一中隊が編纂した、『陸軍經理學校卒業記念』という寫真集がある。一九四〇（同一五）年の一二月に作られたものだが、当時の校長は大城戸仁輔陸軍主計中將であり、本山は少佐として戦術学の教官を務めていた。

個人的なものとしては、まず士官学校時代を主とした寫真集がある。既述のとおり本山は一九一七（大正六）年一二月に士官候補生として歩

兵第二三連隊に入り、翌年一二月に陸軍士官学校に入学している。一九二〇（同九）年五月に同校を退き、翌月に今度は見習士官として再び歩兵第二三連隊に属した。そのころの寫真集のようである。次に一九三五（昭和一〇）年に撮影された歩兵第四五連隊時代の寫真等が別の冊子で残っていた。他には「ALBUM」という小振りの少し厚手の寫真帳があるが、一九三七（同一二）年に写したものの他、旅行風景の寫真となっている。「第十一期内種學生寫真 本山中佐」という薄い寫真帳もあるが、陸軍經理學校學生試験委員を務めていた時代に撮られた、學生たちの寫真冊子とみられる。

画集としては明治天皇の業績を絵にまとめた『聖徳記念絵画集』があるが、奥付がないため出版年等は不明である。陸軍恤兵部が出した絵葉書帖『回顧』という冊子もあるが、「從軍の思ひ出となります様に利用されることを希望致します」との、一九四一（昭和一六）年七月付けでの説明文がある。

最後に紹介するのは偕行社が出していたらしい軍用手帳である。一九三九（昭和一四）年版が一冊だけ残っており、本山は曜日を几帳面に書き換えて一九四〇（同一五）年分として使っていた。巻末には「偕行便覧目次」等があるが、皇室関係記事の後に「陸軍武官官等表」他が挙げられている。彼がどのようなことを手帳に記していたかを紹介していくと、二月一九日（月）の欄に「〇七〇〇 西田小学校ニ挨拶 一二五〇 多数ノ官民有志ニ見送ラレ永年住ミ馴レタル鹿兒島ヲ出發 一七〇〇 上熊本著 一九三〇 高江 二二〇〇 母ノ許ニ歸ル 母、兄弟ノ喜大ナリキ」としている。四月七日（日）には日付を赤丸で囲み、「ドイツ デンマーケ、ノルウェー侵入」とある。その他にもヨーロッパの戦況に関する記

述が散見される。

八月一日(日)分も日付を赤丸で囲み、「〇五〇〇第二回負傷(泉水垢ニ於テ)ノ第一周年記念日」としている。同月一六日(金)は「富士山麓演習見學 彈藥補充ニ関スル研究 兵器勤務隊ノ運用」となっている。九月五日(木)は「幹候戰術教程編纂ノ件デ課長ヨリ依頼セラル本日ヨリ本格的防空演習開始サル 昨四日北白川宮永久王蒙疆地方ニテ墜落機ニ觸レセラレ御戦死遊バサル」と記している。一〇月二三日(水)には予科生徒採用の身体検査について、「検査第三日 三五名中不參七名 一般ニ不合格頻リ 且態度嚴正ナラザルモノアリ 學校教練ノ不振カ」と述べている。

これらの冊子が大要として物語るのは、天皇の軍隊ということである。国民の軍隊ではなかった。

#### 四. まとめとして

アジア・太平洋戦争の敗戦で、「最もその権威を失墜させたのは軍隊であった」<sup>(35)</sup>。また玉音放送後の社会の反応は様々であり、地域や世代によれば徹底抗戦を主張するものもあった。「地域性は空襲体験と密接な関わり」があり、空襲被害の少ない地域は降伏を是としない傾向があったという。世代的には所謂「少国民」が敗戦を受け入れようとせず、大人たちを困らせたことが記録されている。<sup>(36)</sup>

敗戦後の軍の解散や、特に陸軍側に多かった公職追放があり、旧軍人たちは収入の途が絶たれ、荒廃した国土での食糧難が大きな問題として存在した。その後は一九四八(昭和二三)年から次第に「逆コース」へ

の政策転換が始まり、一九五三(同二八)年の軍人恩給の復活、そして戦後復興と高度成長期を経つつ、彼らはそれぞれの地域社会の特性と自らの年齢条件や人脈もあって、多様な適応のあり方を選んでいった。軍人が比較的尊重される九州という地域にあって、熊本県の北寄りの農業地域、菊池市七城町亀尾で戦後の四〇年を過ごした本山には、それなりの存在意義があった。一般の農業者にとっては煩わしい公文書の届出処理や、役所等とのやり取りの調整にも便利な人材であったろうし、軍隊時代の組織管理経験は、土地改良区という、いわば公的組織の運営にも有益であったと考えられる。もちろん単純に総括することは不可能であり、転勤の多い職種で故郷を永く離れていたわけだから、敗戦後に帰還してからの年月においては、地元でそのまま暮らしていた人々との間には、どうしても心理的懸隔が生じてしまうものであった。特に彼の家族にとっては、田舎の閉鎖性に悩まされる面があった。

本山は晩年には郷土史に関心を示していたようだが、それらに関するまとまった資料類は残されていない。<sup>(38)</sup> また一九六九(昭和四四)年に建立された土地改良の記念碑についても、地元の土地改良区や上部団体に何度か問い合わせたが、「過去のことなので、詳細はもうわからない」という回答であった。しかし七城町土地改良区の協力で、当町内分の組織統合に関するおおよその歴史は提供してもらえた。菊池市七城町亀尾における戦後の農地開墾や整備の成果は、その後も改良され現在でも享受されているが、その礎に携わった人々の個別的なことは忘れられていく。ただそこに、敗戦で故郷に帰った一人の軍人がいたのである。その戦後は軍隊時代のことを特に語るでもなく、しかし士官学校時代のつながりを内心で大切に保持しながら、余生を過ごしていった元軍人の忘却され

た記録であった。この一事例を敷衍化して語ることは困難であり、飽くまで地域社会の特性と本人の経歴で形成されていた、戦後の一断片だったとみることができよう。

## 注

- (1) 例えば防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営陸軍部 大東亜戦争開戦経緯(一)』(一九七三年)、第五章「第二次近衛内閣の画期的新政策」中の「米英依存経済」等。日本はエネルギー資源の供給先を実質的に米英経済圏に頼っていたわけであり、「米英依存脱却の中心的課題は、既に明らかやうに液体燃料問題であり、これは生産力拡充計画の強力な推進をもってしても、差し当たり解決不可能のものであった。ここに米英依存脱却問題と表裏の関係において、いわゆる南方問題の解決が必然的に抬頭して来るのであった」(同書三五五頁)。
- (2) 同書付録、原四郎「『大東亜戦争』という名の戦争」参照。
- (3) 安達宏昭『大東亜共栄圏——帝国日本のアジア支配構想』(二〇二二年)が、こうした実態をよく解き明かしている。
- (4) 前掲『戦史叢書 大本営陸軍部 大東亜戦争開戦経緯(一)』、三四八頁。
- (5) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 豪北方面陸軍作戦』(一九六九年)三三五頁、「大本営陸軍部の繁忙、今後また情勢変化があり得るとする陸軍部の配慮、関係機関の複雑な業務系統などにより軍、師団などは輸送先の変更に関し、徒勞し、または苦慮する面を生じた」。
- (6) 田中宏巳『真相 中国の南洋進出と太平洋戦争』(二〇二一年)、一八五頁「米豪連携の重要性とニューギニア・ソロモン諸島の確保の必要性は、太平洋戦争の終結と共に忘れ去られてしまったが、米豪連携は静かに継続し、

アメリカを中心とした太平洋の安寧に貢献してきた」。あるいは「戦後の太平洋におけるアメリカの覇権は、米豪・日米・日豪の連携を基礎にして成り立ってきたが、これを切り崩そうとする中国は、日本軍の戦例に倣ってニューギニア・ソロモン方面に進出してきた」(同書二〇〇頁)。

- (7) 将官が五〇歳代であれば敗戦後数年ほどすれば次第に六〇歳代になっていくわけであり、左官級は陸軍の場合四〇歳代、となれば現場で働き盛りの二〇歳代後半や三〇歳代は元尉官級の人材だったようである。

- (8) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 陸軍航空兵器の開発・生産・補給』(一九七五年)四五頁、「技術将校制度は発足したが、士官候補生出身者で技術将校になった者はまれであった。階級が進むに従ってその配置が少なくなるのがきられ、あるいは士官学校以来習得練磨した指揮官への道を断念できなかったことが大きな理由で、永年にわたり技術に専念しようとする者の乏しかったことが陸軍技術の発展を妨げた」。
- (9) 造船官については造船会編『造船官の記録』正(一九九一年)・続(一九九二年)が、武官及び文官の記録をまとめている。

- (10) 中野義明『肥後もつこす一代』(二〇〇四年)一五六〜一六二頁。
- (11) このことは他の先行研究からも窺える。例えば沢井実『海軍技術者の戦後史——復興・高度成長・防衛』(二〇一九年)等。
- (12) 山崎正男編集責任『陸軍士官学校』(一九六九年)、一八一頁。
- (13) 同書一八五〜一八六頁。
- (14) 以上、渡邊勉『職業軍人の退役後の職業経歴』文中(関西学院大学『社会学部紀要』第一二七号、三七頁)。
- (15) 同書四八頁。
- (16) 以上、防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 支那事変陸軍作戦(二)』(一九七六年)、一三三〜一三三頁。
- (17) 前掲『戦史叢書 豪北方面陸軍作戦』、四三三頁。

(18) 同書四三一頁。

(19) 「師団長は、本山高級副官と共に工兵隊の道路構築作業を視察して居られた。余り爆撃音が近いので附近の洞窟に避難して居られた由である。(中略) 師団長や本山高級副官は此の爆撃について種々心配されていたけれども、(後略)」（ハルマヘラ戦記編纂委員会編集『ハルマヘラ戦記』二七頁）。

(20) 池辺良『ハルマヘラ・メモリー』（一九九七年）が、こうした様子をよく描写している。

(21) 「一方本島に於ては昭和二〇年一月より従来の水際撃滅方式をやめ奥地遠く複郭陣地を設け水際より数次の抵抗を実施し所謂遊撃戦を実施して敵の掃蕩に備えた。此れが為には奥地至る処に農園を作り又各地区隊相互に応援し得る様道路を構築した。此の方式を各地区に徹底せしむる為幕僚は各地区に巡回指導した」（前掲『ハルマヘラ戦記』七九頁）。

(22) 同書三五頁。また「終戦も間近い二〇年二月ごろ、モロタイの北方にあるタラウド諸島のカラケロン島を守っていた第二一聯隊（大隊長・田村少佐）が必死に戦っていた相手は連合軍ではなく、飢餓と病気だった」（同書三二九頁）。

(23) 同書九六頁（第二章現地自活と転任者）。

(24) 『ハルマヘラ戦記』では、同島のことを「春島」とも記載しているが、「春島の終戦は、真に恵まれた状態に於て処理された」という。「一つには、先任諸士の適切な指導によって早期より自治体制が確立されたこと。作戦地域の関係上、自活に必要な諸資材の確保が容易であったこと。地理的環境が充分にその努力を充たして呉れたことによるのであり、(後略)」（以上、同書一五一頁）。

(25) 同書一五三頁。

(26) 今村均『私記・一軍人六十年の哀歎』（一九七一年）、四一八～四一九頁等。

(27) 山崎正男編集責任前掲書一八一頁。

(28) 熊本農業史研究会編『(稿本) 熊本農業史』、IV―七頁（山内良一「第四章 農地改革と自作農の創設」文中）。そして同頁で「この改革の結果としての根本的な変化は、まず第一に、従来の小作料に相当する部分が直接生産者たる農家の手もとに残されることになったことである。(中略) 第二に、農業資本の蓄積によって、経営における農業機械や施設、農薬の使用が積極的に導入されていったことである。そして第三に、戦前では地主に依存せざるをえなかった生産技術の改良や土地改良投資に対しても、国家資金による助成を受けながらではあるが、生産者自ら取りくむことができるようになったのである」と詳述している。

(29) 当時は畑。換地処分もあり、現在の地目は田で面積一、一三二㎡。

(30) 「菊池郡七城村 本山武雄ほか一四名から申請された板井土地改良区設立のことについては、五月一日付認可した」（『熊本県公報』第四七八五号「一九六一年五月二五日」、三六頁「熊本県公告第二〇六号」）。

(31) 土地改良区の役員の機能は、「各土地改良区内部の地域相互の利害を調整する等の生産的なそれを果たすことに加えて、行政的政治的社会的等の多岐にわたっている」（縮形博之編『水と農業』（一九七九年）九六～九七頁、新井信夫「Ⅲ. 土地改良区の経営問題——自作農方式の限界」文中）という、煩雑なものである。

(32) 前掲『(稿本) 熊本農業史』、XI―五六頁（内田敬介「第十一章 農村協同組合運動の展開——産業組合創設から農協の誕生まで」文中）。

(33) 二〇二三（令和五）年一〇月三日に、現在の株式会社ミヨタに問い合わせたところ、熊本支店から「古い時代なので資料とかも残っていないが、深井戸ポンプを担当したもののようだ」との回答は得られた。

(34) 七城町土地改良区からの二〇二三（令和五）年一〇月一日付け回答による。

(35) 川島高峰『流言・投書の太平洋戦争』(二〇〇四年)、三〇二頁。

(36) 以上、同書二九八〜三〇〇頁。

(37) 本山の弟も陸軍士官学校への進路を選択し軍人となるが、第一四軍参謀として出征したフィリピン戦線で一九四五(昭和二〇)年三月に戦死したことが、その墓誌に刻まれている。

(38) ただ歴史に関する興味を持っていた傍証はある。本山が一九七七(昭和五二)年八月に作った彼の家のための墓石に、「始祖 日野奥州本山城主藤原政家/板井住祖 本山左エ門尉 延宝三年」と刻まれており、七城町亀尾の板井という小集落に居住したのが一六七五年であったと、語り残そうとした意思がみられる。

### 【参考文献】

安達宏昭『大東亜共栄圏——帝国日本のアジア支配構想』中央公論新社、二〇

二二年

安西利三郎『戦術原則圖解百題』軍事學指針社、一九三三年

池辺良『ハルマヘラ・メモリー』中央公論社、一九九七年

一ノ瀬俊也『皇軍兵士の日常生活』講談社、二〇〇九年

一ノ瀬俊也『日本軍と日本兵——米軍報告書は語る』講談社、二〇一四年

今村均『私記・一軍人六十年の哀歎』芙蓉書房、一九七一年

牛島満伝刊行委員会編『沖繩軍司令官牛島満伝』春苑堂書店、一九七二年

大井上博代表翻訳編輯『戦車工学』、山海堂、一九四四年再版

緒形博之編『水と農業』東京大学出版会、一九七九年

岡本茂『古代東洋兵學孫子解説(終)』偕行社、一九二九年

偕行社熊本支部『熊本偕行社員名簿』一九五九年

加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』朝日出版社、二〇〇九年

加登川幸太郎『陸軍の反省(上・下)』建帛社、一九九六年

川島高峰『流言・投書の太平洋戦争』講談社、二〇〇四年

熊本農業史研究会編『稿本』熊本農業史』キンコーズ、二〇二三年

熊本県『土地改良区設立一覽表』昭和四〇年四月一日現在

熊本県『熊本県公報』第四七五五号(一九六一年三月二日)、第四七八五号

(一九六一年五月二五日)、第四七八九号(一九六一年六月三日)、第五三九

七号(一九六五年六月一五日)

熊本県菊池郡七城村『七城地域農業構造改善事業計画書』一九六二年九月

熊本県菊池郡七城村『昭和四一年度年度別農業構造改善事業実施計画書』一九

六六年

熊本県菊池郡七城村『昭和四一年度再度実施予定農業構造改善事業(第二次)

計画書』一九六六年

隈部一雄『内燃機關學』山海堂、一九四四年(訂正二九版)

菰田康一編『昭和五年陸軍大學校滿鮮戰史旅行講話集』陸軍大學校將校集會所、

一九三〇年

小山堅『エネルギーの地政学』朝日新聞出版、二〇二二年

沢井実『帝国日本の技術者たち』吉川弘文館、二〇一五年

沢井実『海軍技術者の戦後史——復興・高度成長・防衛』名古屋大学出版会、

二〇一九年

三十二期生会『三二会誌』第一号(一九五三年)、第二号(一九五四年)、第

三号(一九五五年三月)、第四号(一九五五年一月)、第五号(一九五六

年五月)、第六号(一九五六年一月)、第七号(一九五七年四月)、第八号

(一九五七年二月)、第九号(一九五九年一月)、第十二号(一九六二年一

月)

七城村『七城弘報』第一二三号(一九六四年一月一日)

七城町誌編さん委員会編『七城町誌』七城町、一九九一年

造船会編『造船官の記録（正・続）』今日の話題社、一九九一、一九九二年

田中宏巳『真相 中国の南洋進出と太平洋戦争』龍溪書舎、二〇二一年

第五期幹部候補生第一中隊編纂『陸軍經理學校卒業記念』一九四〇年

駐滿記念冊子頒布會『第六師團滿州駐劄記念』一九二五年

ツエー・エー・リヒタース著『化學戰と軍用動物』新美達郎他訳、産業図書、

一九四五年

角田燎『陸軍将校たちの戦後史——「陸軍の反省」から「歴史修正主義」への

変容』新曜社、二〇二四年

津波真勇『「海軍少将の風変わりな一生の思い出」多摩ニュータウンパブテス

ト教会、一九九〇年

中川靖造『海軍技術研究所——エレクトロニクス王国の先駆者たち』講談社、

一九九〇年

中野義明『肥後もっこす一代』朝日新聞社、二〇〇四年

西川虎次郎『明石將軍』大道学館、一九三四年

ハルマヘラ戦記編纂委員会編纂『ハルマヘラ戦記』ハルマヘラ会、一九七六年

福岡良明『戦争体験』の戦後史——世代・教養・イデオロギー』中央公論新

社、二〇〇九年

歩兵第四十五連隊史編纂委員会『歩兵第四十五連隊史』一九八一年

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 豪北方面陸軍作戦』朝雲新聞社、一九六九

年

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営陸軍部 大東亜戦争開戦経緯（一）』

朝雲新聞社、一九七三年

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 陸軍航空兵器の開発・生産・補給』朝雲新

聞社、一九七五年

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 支那事变陸軍作戦（二）』朝雲新聞社、一

九七六年

前間孝則『戦艦大和誕生（上・下）』講談社、一九九九年

前間孝則『技術者たちの敗戦』草思社、二〇〇四年

三輪宗弘『太平洋戦争と石油——戦略物資の軍事と経済』日本経済評論社、二

〇〇四年

森五六『世界大戦史講話』軍事学指針社、一九二七年

山縣大樹『帝国陸海軍の戦後史——その解体・再編と旧軍エリート』九州大学

出版会、二〇二〇年

山崎正男編集責任『陸軍士官学校』秋元書房、一九六九年

山崎雅弘『太平洋戦争秘史——周辺国・植民地から見た「日本の戦争」』朝日新

聞出版、二〇二二年

油井大三郎『避けられた戦争——一九二〇年代・日本の選択』筑摩書房、二〇

二〇年

吉田裕『日本の軍隊——兵士たちの近代史』岩波書店、二〇〇二年

吉田裕『兵士たちの戦後史——戦争の経験を問う』岩波書店、二〇一一年

吉田裕『日本軍兵士——アジア・太平洋戦争の現実』中央公論新社、二〇一七

年

陸軍大学校将校集會所『戦史講義録／陣地攻撃・夜間ノ攻撃（下巻）』兵書出版

社、一九二五年

陸軍士官学校生徒隊編『小戦例集（第一、二輯）』軍事学指針社、一九三〇年

陸軍恤兵部『回顧』一九四一年

陸地測量部撮影『昭和十年特別大演習寫真帖』昭和十年特別大演習総監部、一

九三六年

『聖徳記念絵画集』

熊本県健康福祉部長寿社会局社会福祉課発『軍歴事項の照会について（回答）

／本山武雄軍歴資料（陸軍兵籍・履歴書）』二〇二二年一月二一日（社福

第六〇九号）

沢井実「戦後における元造船官の活動に関する一考察」(南山大学紀要『アカデミア』社会科学編第一三号〔二〇一七年六月〕所収)

沢井実「海軍施設系技術官の戦後に関する資料」(大阪大学『大阪大学経済学』第六七卷第一号〔二〇一七年六月〕所収)

渡邊勉「職業軍人の退役後の職業経歴」(関西学院大学『社会学部紀要』第二二七号〔二〇一七年一〇月〕所収)